

[知恵は至るところで呼び掛ける－《知恵の愛求》としての哲学とは－]

嶺岸佑亮講師への質問・コメント

質問	<p>合理的とされる科学がその根本のところ、何か非合理的なものを前提としているということは、とても興味深かったです。1+1=2 が真ということが、僕には自明には思えません。例えば小学校などでは小石一つを1単位として、それがもう一つあるから合わせて2つといった説明がなされますが、その小石が1に見えるのは我々の器質的、身体的な制約のもとでそう見えるだけで、その小石は、分子や原子のレイヤーで考えたら1ではありません。そう考えると、一般に論理的とされるものであってもなんらかの暗黙の共通了解を前提としているのではないかと思われます。言語についてそれは言えて、会話などは、単文の結合から成るわけで、如何様に結合するかによって論理的だとか、非論理的だとか言われるわけですが、なぜその結合のしかたが論理的なのか説明が不可能です。むしろ、論理性は人々の共通了解という側面を多分に含んでいるのではないかと思ったのですがどうなのでしょう。</p>
回答	<p>非常に重要な指摘です。日常生活であれ、学問であれ、一番の基本となる原理や法則には、〈共通了解〉という性格が多分に見られます。ユークリッド幾何学の平行線の公理や、ニュートン物理学の運動の三法則は、他の様々な定理や法則とは異なり、それ自体は証明を必要としないものとされます。つまり、〈なぜそうなっているのか〉ということをもそれ以上遡って説明することが出来ず、ただ〈そのようになっている〉という事実を受け入れるだけでよいとされます。〈知恵の愛求〉としての哲学は、自明なものとして根本に据えられている原理や法則について、〈なぜ〉ということを探求する営みです。まさにこの点こそ、哲学が他の学問から区別されるゆえんといえます。</p>
コメント	<p>哲学を研究していくうちに単純化されて簡単になっていくとおっしゃっていた点が興味深く感じました。</p>
回答	<p>〈哲学する〉というときに重要なのは、たくさんの方の哲学者の考えを理解したり、彼らの書いた本を読むというようにして、たくさんの方の知識を集めることではありません。もちろん、そうしたことは基礎作業として重要ですが、なによりもまず、〈そもそも何が問題となっているのか〉という出発点にどこまで踏みとどまることが出来るかの方が重要です。哲学的探究の場合、問題の出発点が忘れられてしまうと、議論の首尾一貫性が失われてしまいます。哲学的に探究するという事は、問題の一番の核となるものを見つけ出すことであり、この核を手掛かりとして改めて問題の全体を見渡すことであります。そうすると、一見何の連関もないように見えたところにつながりが見えたり、ばらばらの事柄がまとまることで、問題自体もより単純なものとして立ち現れるわけです。</p>
コメント	<p>哲学について久しぶりに触れることが出来て面白かったです。ドイツの哲学にはあまり触れたことがないので、学んでみたいとも思いました。</p>
回答	<p>それぞれの哲学者は、自分の属する時代・歴史・文化の中で直面する問題に取り組んできました。〈理性的存在者〉である限りの人間誰でも当てはまるような普遍的な問題は、その都度の歴史や文化の文脈に置き戻して理解される必要があります。そうすることで、以前の哲学者が語った事柄を自分の問題としてとらえ返すことが出来るようになります。その意味でも、ドイツに限らず様々な国の哲学者の思想にぜひ触れてみてください。</p>

質問	ご講義ありがとうございました。神、と聞いて思うところがあったので質問させていただきま す。よく科学のトピックにおいて「神の領域」という言葉が使われますが、神、とはこれまで 哲学者や科学者にどのように捉えられてきたのでしょうか。
回答	哲学という知の営みが起こった古代ギリシアでは、ゼウスをはじめとする神々が信じられて おり多神教でした。ですが、〈物事のはじまり〉を問うという哲学の営みが始めると、〈物事の はじまり〉はただ一つのものであるという共通理解が生まれました。その帰結として、〈神は一 なるものである〉という一神教的な考えの下地が準備されました。ユダヤの地で起こったキリ スト教がヨーロッパに広まった背景には、こうした事情がありました。また科学との関連でい えば、あらゆる運動の原因は神にあるという理解がありました。アリストテレスは、あらゆる 運動の中で天体の円運動がすぐれたものであるとしましたが、その原因を神のうちに求め、 〈不動の動者〉と言い表しました。天体についてのこうした理解が覆ったのが、ガリレイやコ ペルニクスらの登場したルネサンスでした。このことからすると、哲学と科学は非常に密接な 関係にあるといえます。

質問	自分は折に触れてアリストテレスなどのキリスト教に影響を受けたことのある哲学者などに ついて学んだ際に、少し哲学について興味を持ったことがあるのですが先生が、この哲学の分 野に興味を持つようになったきっかけは何でしょうか。
回答	そもそもキリスト教やヨーロッパ文化とはどのようなものなのか、という素朴な疑問を中学 や高校生の頃に抱いていました。高校進学後、学校の近くには大きな図書館があったので、 色々読み漁っていました。現在専門対象としているヘーゲル哲学の日本語訳も所蔵されてい ました。岩波文庫の『小論理学』を読んだ際、〈本質とは自由である〉といった趣旨の面白い 理解がそこに書かれているのを読んで、大いに興味を惹かれました。普通であれば、〈本質と はまさしく～である〉とか、〈本質とは～あるべきだ〉というように断定的になるものですが、 そういった理解を突き崩すものをヘーゲルの思想のうちに感じました。

質問	自分は歯学を学ぶために、歯学部に入りましたが、歯学もこの考えにおいては知恵と考えるこ とができます。知恵とは、学問全体を含む幅広いものなのでしょうか？
回答	仰る通り、知恵とは一切のものを包括するものであり、個別の学問や技術、芸術の分野・領域 にとられないものです。ですから突き詰めていけば、知恵は、いわゆる専門家としての「哲 学者」によって獲得されるのではなく、およそ人間である限り誰でも獲得できるものだといえ ます。それも、自分が携わっている営みを徹底的に体得し、極めることを通じてそうだといい ます。資料で紹介したクザーヌスは、『精神について』という書物の中できわめて興味深いこ とを書いています。それによれば、人は例えば匙作りのようなきわめて些細な技術を通じて も、その技術を極めることによって、天と地を創造した神の無限な技術を模倣することが出来 る、というものです。こうした考えは、ガリレイやダヴィンチといった「万能の天才」が活躍 したルネサンスという時代に言い表されました。

質問	知恵と知識は違うものですか
質問	知恵と知識は区別しますか？ 区別する場合、どのような違いがありますか？
コメント	知恵を" 味わう "というクザーヌスの言葉が面白いと思った。
回答	知識は専門化を要求します。人文科学でも、文学と歴史学と心理学が区別されますが、さら には文学では国文学、中国文学、英文学、フランス文学などと区別されます。のみならず、国 文学でも古代文学、中世文学、近世文学など、それぞれの領域があり、領域ごとに研究対象・方 法などが全く異なります。これに対し、知恵はそうした区別を超えて、広く一般に通じるよ うな事柄に関わるものです。古人の知恵というのはどの国にも見られますが、数百年、ある いは数千年という時代の隔たりにもかかわらず、知恵を記した言葉は現代の私たちの生活に 当てはまるものばかりです。これは、知恵の言葉が人間というもののありようを普遍的な見 地から表現しているからに他なりません。

質問	<p>「人間は知恵によって照らされることで自らの知性をはたらかせることが可能となるとともに、自らの生を正しい方向へと導くことが出来るようになる。」とありますが、正しい方向の生とはどういうことでしょうか。生に意味や目的を見出そうとする行為自体が知ることを受し追求する人間特有の感情といえますが、正しい方向に「生きる」こととは自身の生の目的について知性を働かせ自身の最大限の幸福を追求する行為でしょうか、それとも他者に同情・共感し他者のために自身を顧みず手を伸べるといった「理性的」な人間にしかできない自己犠牲・他者尊重の意思を追求する行為でしょうか。</p>
回答	<p>哲学では、まさにその「正しい」という場合の方向性や基準そのものが吟味の対象となります。キリスト教ではそうした基準が神のうちにありとされ、金田ドイツの哲学者であるカントの場合には理性的存在者としての人間が従うべき〈道徳法則〉のうちにありとされました。正しく生きようとする事自体がそもそも、自分が何に従えばよいのか、その方向性や目的を追い求めることを意味します。方向性や目的は、追い求められることによってはじめて見えてくるようになるのです。そのことからいけば、〈正しい方向の生〉は何よりもまず、自分の知性や意志をはたらかせることを必要とします。自己犠牲や他者を尊重することは、自分で考え、自分の意志を自分で決めるというあり方に基づいています。何よりもまず自分の方が自立しているからこそ、相手のことも自立したものとして尊重出来ますし、相手のことを自分と同じように価値や尊厳のあるものとして理解することが出来るようになります。</p>

質問	<p>「哲学の研究では過去の人物の考えを読み解いている」というような言葉が講義中にありましたが、自分自身がどう思うかを考えることはないのでしょうか。</p>
回答	<p>過去の時代の哲学者の思索に取り組むことは、いわば〈哲学という知の営みが行われているまさにその現場〉に居合わせることであり、それ自体フィールドワークであるといえます。どのような研究もその対象が現にあるところで行われなければなりません、哲学の場合、〈真理〉や〈正義〉や〈美〉などについて考察しようとするならば、こうした現場に自らも居合わせることで、何が問題となっているのかを自分で見る必要があります。ですので、過去の哲学者の考えを知ることは同時に、その考えの中で問題となっているのは一体何であるのかを見極め、それを自分の問題として引き受けることでもあるのです。</p>

質問	<p>嶺岸佑亮先生へ：「知」について詳しく講義していただきありがとうございました。先生はいつ頃から哲学について興味を持つようになったのでしょうか？また、先生は唯物論に関してどうお考えでしょうか？ご回答のほどよろしく願いいたします。</p>
回答	<p>自分自身の関心は一貫して、〈自己〉というもののあり方や〈知〉のはたらきであるので、唯物論的な考え方とは程遠いところにいることとなります。ただ専門であるヘーゲル哲学は、マルクスの唯物論的弁証法に連なるものであるのも確かです。自分が物心ついたころには冷戦も集結し、共産主義的な考え方はすでに過去のものとなりつつあり、学部入学の頃には歴史的関心の対象とされていたように見受けられます。自分の指導教官が学生の頃は、学生運動が一番盛んな時期で、そうした流れからヘーゲル哲学に取り組み始めた研究者も大勢います。いずれにせよ、唯物論については哲学的に考察するためのスタートラインにようやく立ったばかりであるという印象を持っています。同世代の若手研究者でも優れたマルクス研究を発表している人も出ています。政治的、イデオロギーの文脈がどうしても強調されることはありますが、〈そもそも何が起きていたのか〉ということを経験し、自分たちが立脚している現代という時代の位置を確認するためにも、唯物論について改めて哲学的に掘り下げる必要があると感じています。</p>

コメント	知恵を味わうものであるとしたり、生きることを知ることとしたりする考え方はとても面白いものだと思った。知恵を人間の能力の最も高次なものであるとする考え方は初めて聞いた。
回答	この考え方が初めてまとまった形で出てくるのは、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』という書物です（岩波文庫から日本語訳が出ています）。もともと知恵は哲学的な概念ではなく、人間の生にとって何よりも望ましいもの、尊いものであるという理解が古代社会で広く見られました。例えば古代ユダヤでも、旧約聖書の中には「箴言」や「コヘレート言葉」など、知恵文学と呼ばれるものがあります。哲学的に見た場合にも、そうでない場合にも、知恵を知ることあるいは知恵を味わうことは、知恵を知り、味わう者の生命が養われることでもあるという理解は共通しています。これを別の仕方と言うと、人間的生は血によって貫かれているということです。

質問	philosophy は自分は知恵をもっていないという考え方が根底にあるということでしたが、ニコラウス・クザヌスの言葉のように知恵を味わうことで、自分の中に知恵が蓄積されると考えることはないのでしょうか。
質問	知恵を味わうとはどういうことなのでしょう。聞いたとき私は、伊沢拓司さんのようなクイズプレイヤーを思い浮かべました。
回答	確かに知恵を味わうことによって、人間はその知性的な側面において養われるといえます。ただし、人間は自分だけで味わったものを蓄積するのではなく、その源となる知恵に対して常に関係し、絶えず知恵から自らの糧を受け取る必要があります。知恵を自分の中に保持することが可能であるのも、そもそも知恵に対する関係を常に保ち続けていることに基づきます。こうした関係を断ったり、失ってしまうならば、知恵を保持することも出来なくなります。

質問	「人間は理性的動物である」という古代ギリシアにおける人間の定義についてです。人間は誰でも生まれつき知ることを愛好する、例えば幼い子が母親に「なんで？」と問いかける時期があるように、それはわかるのですが、例えば犬や猫も知ることを愛好するような節があるように思われます。 「理性的動物」という人間の定義は現在の哲学の上でどの程度支持されているのか、また現在は人間をどのように定義しているのか気になりました。
回答	仰る通り、犬や猫、あるいはイルカなどの動物も高い程度の知能を備えていると考えられており、好奇心が備わっているように見えます。こうした場合、動物の好奇心は反復や習慣によるところが大きいといえます。例えば、餌を同じタイミングで与えたり、同じようなおもちゃで注意を引きつけたりすると、一定の反応を示す場合などがそうです。人間の場合も同様に、反復や習慣を通じてものごとを知ります。例えば、何度も山を眺めると雲の様子で次の日の天気予測がついたり、海の様子で嵐が近付いているのを見て取る場合などがそうです。ただ人間の場合、単に「～の場合には～のようになる」というように個別の事例をまとめて一般化するだけでなく、一般化したものを規則や法則としてとらえ返す点が他の動物とは異なります。法律などの社会のルールも、自然科学の法則も、こうした一般性や普遍性に基づいています。人間が「理性的」であるのは、こうした一般的・普遍的な法則や決まりにのっとって共同体を営むからなのです。

コメント	古代の数学者が同時に哲学者でもある場合がよくあり何故だろうと思っていたが、考えるといったことは哲学としての思考を基にしていると分かって納得が行った。理系分野と、文系分野だと思っていた哲学には何にも関わりが無いと思っていたが、むしろ理系こそ哲学に触れるべきだと思った。
回答	理系の皆さんからすると、観察や実験に基づいて仮説を立てるということ、あるいはあらゆる事柄を数式のもとにとらえるということはいわば当たり前のことかもしれません。けれども、こうした当たり前のことがどうしてそうなっているのか、なぜ、そうした当たり前の手続きに従うならば世界の事象を科学的に説明できるのか、こうしたことについては理解することが出来ません。理系の皆さんにとって哲学が有効・有益なものであるとすれば、皆さんの研究が立脚している基本的な立場を再確認し、どのような視座・地平から世界を眺めているのかを自覚する、ということにあるかといえます。

コメント	これまでずっと哲学を抽象的なものとしか捉えることができず、自分と共感するものもあれば全く理解できずにそのままにしていたものもありました。特に中世ヨーロッパで盛んになった知への取り組みがよくわからず、知と言うものはなんなのか、単なる頭の良さだけではないのかと疑問に思っていました。今回の講義を聞いて過去の学者たちが知をどのように捉えていたのか、人間と知の関わり方を知って納得する部分が多いと感じました。知に対する理解は300年ほどの時を経ても変わらないのだなと感じました。
回答	いわゆる頭の良さというものは、確かに哲学に限らず、学問一般にとって必要な条件といえるかもしれません。けれども学問的研究を行うのに必要なのは、同じ一つの問題に持続的に取り組むことのできる、飽くなき探求心・好奇心です。一見理解したと思える事柄であっても、そこにはいまだに明らかとなっていない多様な側面が隠されたままであることが往々にしてあります。単に頭がよいだけでは、こうした隠された多様な側面を見過ごしてしまいかねません。むしろ、常に関心をもって注意を払い続けることが出来る、ということこそ学問的探究のためには重要だといえます。

質問	私は神の存在を信じていますが、これまでに哲学者たちが哲学の根本にある神の存在を証明することはできたのでしょうか？もちろん私は神の存在を証明することはできませんが・・・。
回答	哲学の歴史上、アンセルムスとデカルトの二人が神の存在論的証明という思想を提示したことで名高いです。それぞれの証明の方法や手順は異なりますが、いずれにしても、人間に本姓的に備わる理性の力のみによって神の存在を確かなものとして証明しようとするのは、理論的には究極的な次元まで達成されているといえます。ただし注意すべきことに、この証明が意図とするのは、単に思考のはたらきだけでなく、心を神へと向けて高める試みでもあるということです。こうした点に注意を促している人物として、13世紀後半~14世紀前半にドイツで活躍したマイスター・エックハルトがいます(説教の日本語訳が岩波文庫から出ています)。エックハルトによれば、人が神を見出すことが出来るのは自分の外側においてではなく、自分自身へと立ち返ることによるとされます。これを踏まえると、神の存在を証明しようとする場合、証明しようとする自分がそもそも何者であるのかも同時に問われている、ということが出来ます。

質問	私は倫理の授業を取っていましたが、レポート課題について考える度に何も思い浮かばないフェーズに突き当たっていました。先生はそのようなときどのようになさっていましたか？
回答	まさに〈何も思い浮かばない〉という事態こそ、哲学的思索にとって重要な瞬間だといえます。すでに分かり切ったこと、自明なことが打ち破られて、今まで明らかとなっていなかったようなことがそうしたところから開かれる可能性があるからです。ですから、むしろどのように答えたらよいか分からない、という経験こそ新たな洞察を獲得するために正しい道歩んでいる証拠だといえます。こうした場合重要なのが、はじめの問題関心を見失わない、ということです。もし別の問題に目を移してしまうならば、そしてそうしたことが何度も続くならば、いつまでたっても探し求めていたはずのものを見つけることが出来ません。ですので、考えた末に出てきた答えが後になってこれではないとして退ける場合でも、出発点の問題関心に立ち返ることが必要です。そこからして、手元にある資料やアイデアなどを見直せばよいわけです。

コメント	哲学に興味があるので、とても面白かったです。 私たち日本人にとってはキリスト教はあまりなじみはないが、神についての議論が大切となると、神の存在を信じる人の視点に立って検討することも重要だと感じました。
回答	数学や科学にとって公理が既に自明なものとして前提されており、社会において慣習が自明なものとして前提されているように、宗教や神学では神の存在が既に前提されています。そもそもその宗教を信じているからこそ、教理や神学に携わるというわけです。ただし、そもそもその宗教を信じていない人がある宗教について理論的に考えるにはどのようにすればよいか、という問題があります。この点については、例えばヨーロッパ中世では護教論という、他の宗教（イスラム教やユダヤ教）に対して自らの宗教（すなわちキリスト教）を弁護士、その信仰の正しさを主張する動きがありました。こうした点に関して極めて興味深いのは、古代末期に活躍したアウグスティヌスです。彼はもともとキリスト教信者の母親から生まれましたが、キリスト教から離れて弁論術の教師としてローマで活動していました。やがて様々な経験を経た後にキリスト教信仰に目覚めるのですが、その経緯が哲学的自伝というべき『告白』の中できわめて印象的に叙述されています。

コメント	現在とっている哲学と倫理の授業への理解を深めることができました。ありがとうございます。資料もとても興味深く、読むのが楽しかったです。
質問	デカルトの批判とはどのようなものがあるのですか。ポストモダンという考え方において、デカルトの批判が必要な理由はどのようなものですか。
コメント	デカルトの言葉が哲学や科学の基礎というのは知らなかった。